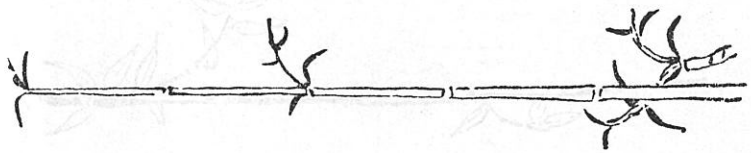


目次

一　なよ竹のかぐや姫……七
二　かいま見……九
三　ゆかしき物みせ給へ……一四
四　仏の御石の鉢……一六
五　蓬萊の玉の枝……一七
六　火鼠の皮衣……二六
七　龍の頸の珠……三二
八　燕の子安貝……三九
九　御狩のみゆき……四六
一〇　月の都の人……五二
一一　飛ぶ車……五九
一二　天の羽衣・不死の薬の壺……六三
解説……六七
附載　今昔物語・海道記……七一

一　なよたけのかぐや姫

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、よろづの事につかひけり。名をばさるきのみやつことなむいひける。その竹の中に、もと光る竹一筋ありけり。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうて居たり。翁言ふやう、「我朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ、子になり給ふべき人なめり」とて、手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。妻の嫗にあづけて養はす。うつくしき事限りなし。いと幼ければ、籠に入れて養ふ。

竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に、竹取るに、節をへだててよごとに、黄金ある竹を見つくること重なりぬ。かくて翁、

㊀武藤本等に「さかきのみやつこ」、群書類従本に「さぬきのみやつこ」とあるこれ。讃岐の造みやつこは御臣で、祭祀をつかさどる者。この人の意。こゝは後文に翁の名。造麿の略で、造麿よれば、翁は官人の意。

㊁底本「竹なむ一筋ありけり」。古本による。

㊂籠（こ）をかけたしやれ。

㊃底本等「女」。おむなおみなは老女。おきなの対。

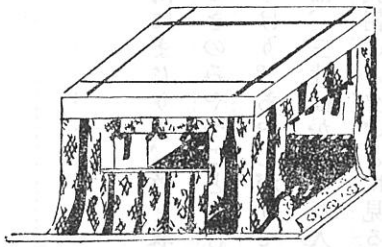
㊄節と節との間の空洞の部分。

㊀古、幼女は髪を下げて、成人すると髪集めの根元が一つに結い上げて、後へたれる。これを髪上げという。㊁左右して。あれこれ手配して、㊂裳を着せる。裳は腰から下に着る衣、平安時代の正装となり、十二、三才頃はじめてこれを着る儀式を行う。㊃顯証。裳着というけしょうとも。㊄立つて、武藤本、清本「けうら」。古際いること。㊅勢さかんな者。富みさかえたこんな意。㊆三室戸齋部秋田かえ。三室戸齋部田かい。京都府宇治の地名。三室戸で、京齋部は姓。祭祀をかつぐ部族。秋田かは名か。

やうやうゆたかになり行く。此兒養ふ程に、すくすくと大きになりまさる。三月ばかりになる程に、よき程なる人になりぬれば、髪上げなどさうして、髪あげさせ裳着す。帳のうちよりも出ださず、いつき養ふ。この兒のかたちのけそうなること、世になく、屋のうちは暗き所なく、光りみちたり。翁心地あしく苦しき時も、この子を見れば苦しき事もやみぬ。腹立たしき事も慰みけり。

翁竹を取る事、久しくなりぬ。㊄勢猛の者になりにけり。この子いと大きになりぬれば、名をみむろといむべのあきたをよび

裳（女子正装）



帳（御帳）

てつけさす。あきた、なよ竹のかぐや姫とつけつ。この程三日、うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男はうけきらはず、よびつどへて、いとかしこく遊ぶ。

二　かいまみ

世界のをのこ、あてなるもいやしきも、いかでこのかぐや姫を得てしがな、見てしがなと、音に聞きめでまどふ。そのあたりの垣にも、家のとにも、居る人だに、たはやすく見るまじきものを、夜はやすきいも寢ず、闇の夜に出でても、穴をくじり、かいまみ、まどひあへり。さる時よりなむ、よばひとはいひける。

人の物ともせぬ所にまどひありけども、何のしるしあるべくも見

㊀なよ竹。女のなよやかな姿たとえるに用いられる。竹から出た女故、女の語の美しさたとえるこの冠たもの。㊁垂仁天皇の妃、迦具夜比賣命（ひめのみこと）などかぐや姫の巻。「かぐや」はかぐやの意。「かぐや」は「はや」（光映）の意。「はや」は「輝き光る姫」の意。又「はや」は「姫」の意とも。「はや」は「木の花の咲くや姫」の連体形やと同じく動詞の連用形にも接続する間投助詞でもあろう。新解）

㊂手をうちあげ、ある意。酒を飲み、楽しみ、声をあげる。手をうち、声をあげることを。約してうたげ（宴）という。語ができたというけれども。㊃取る意か。よ古本等によりぎらいをすることなく、誰でもの意。古本「上下えらばず」㊄底本「よひほとへて」（夜日程へて）り取り、よりぎらいを改む。㊅外、戸の二解がある。㊆垣間見の音便。垣の間から見る。のぞき見る。㊇よぶから出た「よばふ」の連用形から名詞になった語で、男が女を呼び、結婚を求める意。それを夜ゆく故夜這ひとこじつけたもの。㊈物音（ものと）もせぬか。物しもせぬの意かとも、物の数ともしない意がともいう。